

[01_02]海外大学図書館等視察報告

渡邊, 由紀子

昌子, 喜信

<https://doi.org/10.15017/16479>

出版情報 : 海外大学図書館等視察報告. 1-2, pp.1-, 1997-12. Kyushu University Library
バージョン :
権利関係 :

海外大学図書館等視察報告

第1集 連合王国

渡邊 由紀子

九州大学附属図書館情報管理課雑誌情報掛

(現在は、九州大学法学部図書館)

訪問国： 連合王国

訪問先： オックスフォード大学ボードリアン図書館

ケンブリッジ大学図書館

英国図書館

期 間： 平成8年10月9日～19日

平成9年12月

九州大学附属図書館

目 次

はじめに	1
1. オックスフォード大学ボードリアン図書館	2
1. 1. 図書館概要	2
1. 2. 西洋古刊本について	2
1. 2. 1. 目録	2
1. 2. 2. 保存	4
1. 3. 東洋関係資料について	8
1. 3. 1. 日本関係資料	8
1. 3. 2. 東洋関係資料（日本関係以外）	9
2. ケンブリッジ大学図書館	11
2. 1. 図書館概要	11
2. 2. 西洋古刊本について	13
2. 2. 1. 整理	13
2. 2. 2. 保存	15
2. 3. 東洋関係資料について	16
2. 3. 1. 中国・日本・韓国／朝鮮関係資料	16
2. 3. 2. インド及び東南アジア諸言語資料	17
3. 英国図書館	19
3. 1. 図書館概要	19
3. 2. マニユスクリプト	19
3. 3. インキュナブラ	20
3. 4. 英国古刊本の受入業務	21
3. 5. 利用者サービス	22
3. 6. 資料保存	23
3. 7. 資料電子化	24
おわりに	26

はじめに

平成8年10月9日から19日までの11日間、平成8年度「九州大学創立八十周年記念事業国際学術交流基金による事務系職員の海外派遣」により、単独で英国を訪問する機会を与えられた。私が図書館職員として選択した訪問先は、長い歴史と伝統を持つ、オックスフォード大学ボードリアン図書館、ケンブリッジ大学図書館、英国図書館の三つであり、まさに「英国三大図書館巡り」とも言うべき出張となった。

今回の訪問目的として設定したテーマは、次のとおりである。

1. 西洋古典籍の整理・保存方法等の調査・研修
 - ・写本を含めた古典籍の特殊コレクションの見学
 - ・整理・目録方法について
 - ・資料保存の方法について
 - ・資料の電子化等「電子図書館」への対応について

2. アジア系留学生・研究者の受入体制についての調査・研修
 - ・図書館での受入体制について
 - ・アジア系関連資料の収集・整理・保存方法について

1. においては、西洋古典籍、すなわち、概ね15世紀から18世紀の間にヨーロッパで印刷された西洋古刊本の取り扱いについて歴史的な経験を持ち、長年資料保存への取り組みをしてきた英国の代表的な図書館を実際に訪問し、どのようにこれらの資料を整理・保存しているのかを調査しようとした。

また、2. においては、本学において近年増大してきたアジア系留学生・研究者への効果的対応策を、国際交流に関しての先進国である英国の図書館で、利用者サービスおよび資料収集等の面から調査しようとした。

以下、各図書館で見聞してきたことを訪問順に報告していきたい。

1. オックスフォード大学ボードリアン図書館 (The Bodleian Library)

1. 1. 図書館概要

オックスフォード大学の中央図書館。14世紀に起源を持ち、宗教改革の混乱期を経て1602年に再建され、再興者トマス・ボードレイ郷の名に因んでボードリアン図書館という。ボードレイ郷が1610年に出版業組合と納本協定を結んで以来、納本特権を持つ。蔵書数約624万冊。貸出図書館ではなく、閲覧室にある少数の基本図書、参考図書、主要雑誌以外は書庫にあり、蔵書のほとんどが閉架式となっている。職員数は外部資金によるスタッフも含めて約500人。

現在の建物はいくつかに分かれており、本館は旧図書館 (Old Library, 2,402 m²)、新図書館 (New Library, 18,975 m²)、クラレンドン・ビル (Clarendon Building, 560 m²)、ラドクリフ・カメラ (Radcliffe Camera, 3,069 m²) の一群より成る。旧図書館の閲覧室と新図書館の書庫との間の資料の移動には、地下のトンネルを利用したコンベアーによる自動運搬システムが使用されていた。また、近年になって郊外に保存書庫 (Book Repository at Nuneham Courtenay, 2,994 m²) を造り、稀用資料はそちらに保存しているとのことであった。本館の他に5つの独立した分館があり、その一つである日本研究図書館も訪問することができた。

ボードリアン図書館以外に大学内には各カレッジの図書館と学部図書館があり、伝統的に独立して運営されてきたが、ボードリアン図書館では1997年1月からの新館長の下、学部図書館にも権限を持つように組織改革計画が進行中とのことであった。

なお、さすがに有名な観光地であるためか、旧図書館では観光客を対象に一時間程度の公式ガイド付きツアーが催行されていて、私もこのツアーに参加してハンフリー公爵図書室 (Duke Humfrey's Library) を見学することができた。また、旧図書館の入口のところには図書館ショップ (Bodleian Library Shop) があり、様々な魅力的なボードリアン図書館グッズが販売されていた。

ボードリアン図書館のWWWホームページは、<http://www.bodley.ox.ac.uk> である。

1. 2. 西洋古刊本について

1. 2. 1. 目録

1) 担当

新図書館にある Department of Printed Books の Special Collections Division が整理業務を担当しており、同部門の Mr. Clive Hurst (Head of Special Collections) と Ms. Dunja Sharif より目録業務の実際について説明を受けた。現在の目録専任スタッフは3名ということであった。ただし、1501年以前に出版されたインキュナブラ (揺籃期本) は、印刷冊子体目録出版のために別プロジェクトとなっており、別のシステムで3名が担当しているという話であった。

2) 冊子体目録

目録業務の機械化以前は、大型の冊子体ファイルが刊本の事務用基本目録だったとのこと。この Old Catalogue は、日本で見慣れたカードカタログとは違い、大型の冊子体ファイルで、各ページに一点毎のスリッパ (2×5 cm程の紙片) が沢山貼ってあった。著者名順で配列してあり、紙片を間に入れるときは、前後を全て貼り替えてずらさなければならないという大変なもの。貼付待ちスリッパが大変滞ったことも目録機械化の契機の一つとなっただろう。広い事務室の端から端までこの冊子体ファイルが200巻以上並んでいた。

3) Pre-1920 Catalogue on CD-ROM

利用者用の目録は見るができなかったが、1920年以前に出版された目録情報約130万件はCD-ROMになっており、こちらのデモを見せてもらった。**"The Bodleian Library Pre-1920 Catalogue of Printed Books on CD-ROM."**は、ウィンドウ・ベースの画面で初心者にも使いやすそうであった。このCD-ROMは **Oxford University Press** から市販もされている。検索項目の中で特に目に付いたのは出版地である。出版事項フィールドの出版地名を、出版地フィールド (**Place field**) で現代英語形に全て人手で正規化し、一種の出版地名コントロールがなされていた。* 指定による全タイトル検索も可能で、出版年代の範囲限定もできるとのこと。この時代の目録規則は英国図書館の **Panizzi** ルールを元にしたボードリアン図書館独自のものであった。

4) 目録システム

現在では目録業務はもちろん機械化されており、1988年9月以降はIBMの図書館パッケージシステム **DOBIS** による **OLIS (Oxford Library System)** でオンライン目録が作成されている。ちょうど訪問時には、新システムへのリプレースの最中とのことで、**Windows95** 上で動く新システム **GEAC** の **GUI** での目録作成画面もを見せてもらった。

5) 目録規則等

Special Collections Division では、1850年以前に出版された刊本を目録対象としている。機械化以前は英国図書館の目録規則を元にした独自規則によっていたが、1988年からの機械化を機に「英米目録規則 第2版」(**AACR2**)を採用し、米国議会図書館の **"Descriptive cataloging of rare books, 2nd ed."** (**Library of Congress, 1991**) も併用するようになった。

6) 古刊本目録記述の特徴

書誌ユーティリティーである **CURL** と **RLIN** のメンバーなので、目録を作成するに当たってまず両データベースの書誌データの検索はするが、古刊本はヒット率が低いため、新刊本のようにデータをダウンロードすることは少なく、自力でオリジナル入力することが多いようだ。**RLIN** の方が英語以外の古い出版物のデータを持っているとのこと。

新刊本の目録と違う点としては、タイトル、出版者名、ページ数、大きさのとり方、および注記の詳しさが目立った。

古刊本のサイズがわかりにくい場合は、「ギヤスケル」(**Philip Gaskell, "A new introduction to bibliography", Calrendon Press, 1972**) の85ページなどを参考にして判断している。「紙の目」や「ウォーターマーク」を透かして見たり、丁合どりの折り記号を参照したり、紙片数を数えたりする作業が必要になる。因みに、古刊本の整理に際して「ギヤスケルは大変有用だ。」と聞き、この本を書誌学の基本文献として知ってはいたが、改めて読み直す必要を感じた。

注記にある折り記号の上付文字は、コントロールキーを使って容易に入力できるようにしてあり、コード入力をするよりも便利そうであった。

また、**Pre-1920 Catalogue on CD-ROM** にもあったように、目録作成時に出版地は英語形に正規化して、出版事項とは別の出版地フィールドに入力するようになっていた。古刊本に多い地名のラテン語形(特に格変化した属格形のもの)や古地名は、このフィールドがあるおかげで統一された現代英語形での検索が可能となっている。日本の学術情報センター総合目録(**NACISIS-CAT**)には無い項目なので、今まで考えたことが無かったが、古刊本の場合もし出版地が検索項目であれば、出版地と出版年代での検索などの際、なにかと便利だと思う。現行九大図書館システ

ムでもローカル側で検索キーとして現代英語形出版地を検索語に追加することは可能なので、一考の余地があろう。ただし、現代形への正規化は目録担当者がしなければならないので、作業の負担は増えるかもしれない。

同様に出版者名についても、英語形に正規化して付け加えるとのこと。（例えば、Stephanus は Steven とするなど。）

さらに、標題紙上の装飾や製本状態、表紙裏のサインや蔵書票についても注記を作成していた。これらの注記については、担当者によって精粗の差が出ないように、どのレベルで記入するのか、ガイドラインを決めてあるということであった。

7) 件名

件名標目は「米国議会図書館件名標目表」(LCSH)を使用して付与している。日本と違って件名を検索キーとして付与することが、目録担当者にとって当たり前となっているようで、見習わなくてはならない点だと思った。

8) 分類

分類方法について尋ねたが、主題での分類はしていないとのこと。件名標目で主題を明らかにしているので、分類は即ち図書を配架する際の書架記号と考えて良いようだ。その請求記号中には、出版国記号/出版年代区分/現物の大きさ区分/受入順一連番号を持たせてあった。ほぼ完全閉架式の図書館だからこそ、主題区分よりも書架スペースを節約するための大きさ区分が重要な意味を持っているようである。確かに、同じ位の背の高さの本を集めて受入順に配架すれば、書架の段組は最適の単位で済む上、分類の変わり目に余裕を持たせる必要も少なく、無駄な空間を少なくすることはできるであろう。アメリカ式の主題別十進分類法と開架式書架に慣れている身には、大きさ区分は珍しいものであった。

9) 遡及入力

現時点で書誌160万件以上を既にデータベースに登録済みである。現在、基本目録を遡及入力する大プロジェクトに4年間の予算が付いて、入力作業を継続中とのこと。もちろん、遡及入力プロジェクトは通常の日録業務とは別扱いで、専従のスタッフが確保してある。ただし、4年計画で冊子体目録からの入力が全て済んでも、その後のデータメンテナンス作業にはさらに長い年月が必要となるであろう、という話であった。

1. 2. 2. 保存

1) 担当

独立した部門である **Preservation & Conservation Division** が、蔵書の保存 (**preservation**) と修補 (**conservation**) に関する全般の事柄を担当している。ボードリアン図書館の資料保存については、ボードリアン図書館附属日本研究図書館長イズミ・K. タイトラー氏による「**Bodleian Library** における資料保存について - 現状・問題点・対策など -」(『早稲田大学図書館紀要』32号、1990年3月) に詳しいが、1990年当時には **Conservation Section** だった部門が、現在では **Preservation & Conservation Division** に強化され、スタッフは約50名とのことであった。部内は大きく2部門に分けられ、保存部門では主に蔵書に対するダメージを予防する方策をとっており、修補部門では主に工房での作業などをおこなっている。

近年設置された部長直属の管理・渉外担当ポストである **Preservation Officer** の **Mr. Toby R. Kirtley** に新図書館において案内と説明を受けた。以下、見学順に要点を述べる。

2) 事務室 (Reception Area)

この新図書館4階にある事務室には、当部門に手当をするために持ち込まれた図書館資料の動きを管理する担当者が配置してある。量的に一番多いのは一般製本のためにやってくる現代の資料であるが、これらは開架資料なので、素早く製本し閲覧に供す必要がある。部門内では手当をするのに現物をいくつかの場所に分散させるをえないため、利用者等の必要があった場合に、現物が今現在どこでどういう状態にあるかを即答できるように、取扱中の全ての資料の動きを管理しているそうである。

また、館内展示や展示用外部貸出を担当するスタッフも1名いて、旧図書館にある展示室 (Exhibition Room) の展示環境監視システムが、この事務室に設置してあった。MEACO製の無線小型装置を展示ケース毎に取り付け、事務室にあるコンピュータで、温度、湿度、光度などの展示環境のチェックが常時行えるようになっていた。

3) 保存対象資料の選択方法

ここでの保存対策の対象となる資料の選択方法には、以下の三つがある。

① 展覧会に出品しようとする資料からの選択。

展示の担当者や他の美術館の人が展覧会用の資料を選択した際に、保存部門で現物を調査して、館外貸出や展示に適さない状態の場合、それら全ての資料を手当する資源がないので、謝絶することがある。しかし、展示の担当者がどうしてもこの資料がその展覧会には必要であり、修補をしてほしいと言え、それを保存対象資料として引き受ける。いずれにしても、展示用に外部貸出する資料は全て保存箱に入れて保護される。

② ミーティング・システムによる選択。

より公式な方法は、そのコレクションを一番よく知っている各部門の代表者とのミーティング・システムである。手当が必要だと思われる資料の優先順リストを元に、どういった問題があり、保存部門に何ができるかを議論し、現物を調べてから手当のための調査票を作成する。実際のところ、あまりにも多くの資料が既にリスト化されているため、このミーティング方式は行き詰まってきている。今では始終会議をしていないとまらない状態である。一、二のプロジェクトからは、直接保存対象資料を受け取り、保存箱の作成や再製本などをおこなうこともある。

③ Duty Conservator による任意の選択。

専従コンサベーター (duty conservator) 制度があり、毎月異なったコンサベーターが当番制で、緊急を要する個別のケースに対応している。書庫には同じ状況下にある沢山の手当が必要な資料があるが、これは利用者と主にスタッフの当面の必要性に対応する一つの方法ではある。

4) 保存箱の利用 (Boxing)

資料を箱に入れて保護する Boxing は、基本的な資料保存方法である。対象となる資料により三段階の保存箱が使用されている。第一段階は Commercial Boxes と呼んでいる、市販の様々な規格サイズの非酸性紙の組立式箱や封筒によるもので、一般的な現代の未製本雑誌等に使用。第二段階は個々の図書に合わせて作られた、帙上の組立式箱であるフェーズボックス (Phase Box) によるもので、古書やより重要な資料に使用。第三段階は、更にしっかりした布や紙材を用いた特製の永久保存用箱で、貴重な資料に使用する。この第二、第三段階の保存箱は、事務室隣の Boxing Room で製作されていた。

フェーズボックス (段階箱) とは、本来、資料の手当の「最初の段階」で用いる箱という名前ではあるが、実際には、ほとんどの資料にはそれ以上の手当をする予算が乏しいため、このフェーズボックスが最終段階となっている。現時点では特別

な一、二のコレクションについては全点を保存箱に入れているものがあるが、普通は特定の保護のためや展示会貸出用のために保存箱に入れている。最終的には、全ての本にフェーズボックスを導入するのが理想ではあるが、そのためのお金はいくらかかるかわからない。せめて全特殊コレクションだけでもフェーズボックスに入れるための予算を、「公営宝くじ（National Lottery）」による資金に期待しているという話であった。（ここ2、3年間、旧図書館環境改善のために「公営宝くじ」による資金約700万ポンドを、改装費用として要求しているそうである。）

5) 保護冊子の利用（Fasciculing）

保護冊子（Fascicules File）とは、ドライクリーニングや修補が済んだ一枚物の一辺を和紙で台紙に固定し、裏表とも見ることができるようにした上、一葉の外側の辺が台紙の内側に収まる大きさにして、利用時に傷むことを回避できるようにした冊子体のファイルである。これには一枚物だけでなく、小冊子の背を固定してファイルすることも可能である。Sheet Roomの見学時には、バラの楽譜を修復中だった。Fasciculingは大変時間とお金がかかる仕事だという。この部屋では、大小様々な一枚物を取扱っているとのことで、大型の一枚物の地図を、細く巻いて無理な力をかけないように大きな筒に巻き付けた後、大きな縦長の箱に納める方法も見た。

6) 修補製本（Conservation Binding）

一般製本とは別に、古書や貴重書の製本、解体、修補をおこなう Conservation Bindery Roomがある。修補製本には、高度な技術と知識が必要とされる。製本担当者は、再製本のために必ず事前に大まかな出来上がりサンプルを作成しており、たいへん慎重に原型を保存しつつ、現代の図書館向きに利用の便を考えて、解体後の再製本がなされている様子を伺うことができた。数十年前になされた処置がかえって資料を傷める結果となったという反省に立って、現在では、全て可逆的な措置であるべきだとの考え方を基本としている。

この部屋で担当している、ハンフリー公爵図書館開架コレクション修補計画（Duke Humphrey's Library Project）は、5年間のプロジェクトである。同図書館のある旧図書館は古い建物なので、温度、湿度、光度など様々な環境上の問題があり、最終年次である来年には同図書館を6ヶ月間閉室して、全ての図書を移動させて図書室を改装し、総仕上げをおこなうとのことである。プロジェクト専任のスタッフに、閲覧室で使用しているブック・シュー（Book Shoe）を見せてもらった。これは図書の背を出したままその他の辺を保護できる、いわば本の靴であり、特に美術館のショーケース的な意味を持つハンフリー公爵図書館のような書架においては、歴史的な外観を損ねることがなく、その利用価値は高い。背の部分にかかるマジックテープで止めるバンドには革と同色が使用されていて、書架に並べてみると外から見ただけではわかりにくいようになっていた。

7) 保存マイクロ化

Photographic Studioでは、修補などによる資料それ自体の形態の保存と並行して、資料の内容を保存するために、保存用マイクロフィルムが作成されている。Microfilm Areaには、4台のマイクロ用カメラが設置されていた。マイクロフィルムの現像は外部の一般現像所で行うが、現像後に1フレーム毎のチェックをし、必要があれば撮り直しを行って、再度現像へ回して完全を期している。

アメリカのメロン財団によるプロジェクト（Mellon Foundation Project）では、100万ドルの資金援助により、既に200万以上のフレームと3000巻のマイクロフィルムが作成済みであった。同財団がマイクロ化に当たって、重複を避けるためにマイクロ化する全ての品目のMARC（機械可読目録）を作成することを要求したため、現在約8000レコードのマスター・レジスター・データベースを作成している。これまでにマイクロ化してきた資料のほとんどは、既にボードリアン図

書館で目録済みであり、かつ、それらのレコードはCD-ROMになって凍結されているため、マイクロ化の詳細をそこに付け加えることはできない。そこで、MARCCレコードをワープロソフトで作成し、フロッピーディスクで月1回英国図書館へ送付して、そのデータを変換してからマスター・レジスターへ登録してもらっており、この方法は大変うまくいっているとのこと。

マイクロ化した資料の現物は保存箱に入れられ、厳しい利用制限の下に置かれる。管理者（Keeper）の許可なしには現物の利用はできなくなり、その代わりにマイクロフィルムが利用に供されることとなる。保存用には3世代のマイクロフィルムを作成している。保存用マスター・ネガ、複製用ネガ（"Stock" negative for printing）、ポジ・フィルムである。保存用マスター・ネガは、館外の8マイル程離れた所にある保管所に収納してあるそうだ。

8) 資料電子化

写真スタジオ内では、オックスフォード大学と共同のプロジェクトでもある資料電子化計画（Digitization Project）も進行中で、見学時にはケルトの文書を男性スタッフ1名が、資料を傷めないように特別の照明を使って、電子カメラで撮影中であった。一枚のスキャニングに1～2分かかるとのことである。PCのハードディスクに一時的に収められたイメージ・データは、一杯になる頃にダウンロードされて、図書館のファイル・サーバか、大学のファイル・サーバへ送られる。1ページ当たりが20MBの容量と言われるため、このようなプロジェクトでは大容量が必要である。これらのような容量の問題や、壊れやすい資料をスキャナーにかけるということ、イメージデータの著作権と管理の問題、画像をネットワーク上にのせること、などなどいくつも問題点があるが、このプロジェクトの終わりにはそういったの問題が解決され、ハードウェアの大幅な改良により、スキャニングの時間も短縮されることを望んでいるという話であった。

9) 一般製本（General Binding）

ボードリアン図書館の製本は全て館内で行われている。大量の一般の図書、雑誌の製本のために広い作業場があり、開架用の製本を主に行っている。ここでは18世紀以降の資料を対象に、傷んだ図書の布（リネン）による修補が行われていた。

10) 修補工房（Conservation Workshop）

保存部門の一部は新図書館内だけでなく、通りをはさんだ向かい側のクラレンドン・ビルにもあり、そのPaper Conservation Workshopでは、工房の女性スタッフ2人が作業内容を説明してくれた。

ボードリアン図書館では数年前に国立国会図書館の大山清二氏により、日本の古典籍修補技術の紹介指導が行われており、裏打ちや虫損部分には和紙が使われていた。この辺りの事情については、大山清二氏の「日本の古典籍を修補する - オックスフォード大学ボードリアン図書館にて -」（『国立国会図書館月報』386号、1993年5月）に詳しい。

スクラップ・ファイルのような冊子（guard-book）から、綴じてある文書を一枚ずつ取り外して修補中であった。その他、現在手掛けられている、1659年に書かれた暗号文の手紙や、三巻ものの古い楽譜、箱入りのコーランが書かれた小片なども見せてもらったが、どれも「難しい仕事」という話であった。

1. 3. 東洋関係資料について

1. 3. 1. 日本関係資料

1) Bodleian Japanese Library 概要

オックスフォード大学内の日本関係資料は、一部を除いて全てボードリアン図書館附属日本研究図書館 (Bodleian Japanese Library) に所蔵されている。この図書館は、ボードリアン図書館がある市中心部からは少し離れたセント・アントニー・カレッジ構内に、1993年に新築された日産日本研究所のモダンな建物の中にあり、館内は全体に明るい印象であった。Izumi K. Tytler 館長に説明と案内をしていただいた。

図書館全体の面積は312㎡で、閲覧室と事務室は一階にあり、10万冊近くの収容能力がある手動式集密書架を持った書庫と、ニューメディア室、貴重書庫が地階にある。書架記号は、ボードリアン方式に従ってサイズ別→受入順で付番してある。開架式が採用されており、主な資料は書庫にあるが、閲覧室にも参考図書が主題別に配架してある。閲覧席数は32。現在スタッフは館長を入れて4人で、遡及入力にパート2名を採用しているとのこと。

2) 資料収集

ボードリアン図書館の日本関係資料の収集の歴史は、この図書館の初期に属する17世紀初頭にまで遡る。中国・韓国研究に関する日本語資料や、授業で使用される東洋学研究所と中国学研究所の資料を除いて、大学の日本語資料は全てこの日本研究図書館にある。内容的には歴史、宗教、文学の分野に特に強く、日本の地方史についてはヨーロッパの収集を誇っている。日本の歴史や文化に関する西洋諸言語の資料も、納本や購入によって収集されている。

受入・所蔵資料は、日本語対英語が6～7対1の割合。納本と購入は購入が少し多い。

3) ALLEGROシステム

目録、受入、閲覧の各業務にはオックスフォード大学図書館システム (OLIS) が導入しており、西洋諸言語の資料の大部分は、既にOLISのデータベースに登録済みである。

日本語資料の目録にはALLEGROというシステムを使用している。ALLEGROは、元々ドイツで学術図書館用に開発され利用されていたパッケージシステムであり、中国語の表示できるOPACを探していたボードリアン図書館の中国語担当者により導入された。英国のPCベースで動作が可能なものであり、日本語にも適用性があったが、日本語のFEPが見あたらず、京都大学のOMRONを基にしたJitsuYouというFEPを外注して作ってもらった。端末にはIBM互換機を使用しており、DOS上で動く。1993年7月にまずスタンドアローンで使い始め、ネットワーク環境の整備により、1994年12月中旬よりオンラインでの検索が可能となった。

このALLEGROは、日本研究図書館のみならず、大学内の他の図書館が所蔵する日本語で書かれた図書・雑誌の詳細な目録を、日本語の原綴とそのヨミのローマ字との両方から検索可能な状態で提供している。

インデックスはブラウジング方式で画面に一覧が表示される。カナヨミはALLEGRO上でローマ字形へ変換されている。

現在OPACの利用はキャンパス内に限られるが、そのうちイーサネットにのせる予定。ただし、利用者の要求が増加しそうで、業務との兼ね合いもあり考慮中とのこと。

4) 英国内日本語図書総合目録プロジェクト

日本の学術情報センター (NACSIS) と英国の研究図書館との協力で、1990年3月に始まった「英国内日本語図書総合目録プロジェクト」のメンバーとして、学術情報センター総合目録 (NACSIS-CAT) の分担目録にも参加している。書誌・所蔵データをNACSIS-CATからダウンロードし、ALLEGROで作成したデータをOPACで提供している。この方法による日本研究図書館の遡及入力、蔵書7~8万冊のうち90%を終了し、カードケースは今年中に処分できるという話であった。

このプロジェクトには、ボードリアン図書館附属日本研究図書館の他、ケンブリッジ大学図書館、ロンドン大学図書館、シェフィールド大学図書館、スターリング大学図書館、英国図書館が参加している。『学術情報センター紀要』第8号 (1996年3月) に英国CATプロジェクトの最終報告が出ている。(参照: Brian Perry, "NACSIS-CAT Project Final Report.", p. 385-434、宮澤彰「英国CATプロジェクトを終えて」 p. 435-441)

5) 件名標目

件名標目にはLCSHを使用し、基本件名標目 (BSH) があっても、一旦消してダウンロードしている。件名は研究者にとっては重要な項目なので、NCの書誌データになればせつせと入力している。「なぜ日本では件名標目が軽視されているのか?」という質問を受けた。日本国内の目録担当者の入力促進を望んでいると、耳が痛かった。

1. 3. 2. 東洋関係資料 (日本関係以外)

1) ボードリアン図書館東洋部

日本関係を除く東洋関係資料は、新図書館内の Department of Oriental Books が担当している。Keeper of Oriental Books の Mr. A. D. S. Roberts に説明と案内を受けた。

当部門の東洋諸言語資料の担当責任者は、アラビア・ペルシャ・トルコ語、中国語、ヘブライ語、韓国/朝鮮語、各一名とのこと。

図書館にとっては、外国からの留学生や研究者もあくまでも「利用者」であり、特に別扱いはしていないが、当部門では東洋学の研究をしにアジアから来ている人々のために、中国・日本語用の特別な目録システムであるALLEGROと、中国語のカード目録、東洋部閲覧室、更に研究用に十分な良いコレクションを持っている。

2) 目録

韓国/朝鮮語の目録は、現段階ではローマナイズして西洋諸言語と同様にOLISのデータベースへ入力しているが、ALLEGROを拡張して、ハングルと漢字をそのまま使えるようにしたいと考えているようだ。中国語の目録については、中国語担当者が、二名の中国人と共に、機械可読データへ変換するプロジェクトを行っており、それが終了すれば、もうすぐ閲覧室の中国語カード目録は無くなることとなっている。こうして、中国・日本・韓国/朝鮮語のいわゆるCJK問題は、ALLEGROの導入で解決する予定である。件名標目にはLCSHを使用している。

3) 資料収集

資料収集の面では、英国のアジアへの関心は19世紀の帝国主義時代からではあ

るが、所蔵資料は17世紀初頭のボードリアン図書館再建当時に収集された中国の古典籍にまで遡ることができる。現在では当該出版国からの購入がほとんどを占めているが、一部交換があり、寄贈も沢山ある。生憎現地での資料収集のための出張は難しいため、購入方法は通信に頼っている。普通は全国書誌などの図書リストにより選書をしている。特に、韓国の地方史の収集努力をしているとのこと。中国の地方史については、台湾でのリプリントが大量に書庫に並べてあった。

4) 新図書館書庫

新図書館の地下の書庫は、全て空調のコントロールがなされていて、大変良い環境に保ってあった。書架記号は、言語別→サイズ別→受入番号順に付番してある。アラビア語、ヘブライ語、アルメニア語、グルジア語などの大きなコレクションが並んでいた。

書庫の電灯を、書架の列の両端にそれぞれある紐を引っ張って点けたり消したりしていたのが、人の出入りと連動していて便利そうであった。

5) 東洋部閲覧室

閲覧室には2名程のスタッフがカウンターに配置され、請求票によって利用の申し出があった資料を、書庫から出納したりしている。閲覧室の参考図書は開架式だが、利用時はスリップをその本があった書架に挟んでおいて、だれがどこで利用しているか分かるようにしてあった。今は健在であるこのカード目録も、もうすぐ撤去される運命である。

6) Indian Institute Library

1960年代に新図書館の屋上に増築されたため、ここからの窓の外の眺めは良かった。閲覧室の見学をしたが、ここにはインド、パキスタン、アフガニスタン、スリランカなどの研究のための、8000冊に及ぶ開架図書が主題順に配架してあった。

2. ケンブリッジ大学図書館 (Cambridge University Library)

2. 1. 図書館概要

ケンブリッジ大学の中央図書館。英国図書館、ボードリアン図書館と並ぶ英国3大研究図書館の一つで、英国内に5館ある納本図書館の一つでもある。蔵書数は約600万冊。ボードリアン図書館とは違い、200万冊あまりが開架図書であり、一部貴重書を除きその蔵書は貸出可である。職員数は約200人。3つの分館がある。1930年代に移転した、立派なタワーを持つ中央図書館の建物は、中心部から少し離れた所にあり、写真から想像していたよりも大きく周囲は広々としていた。しかし、増える蔵書に書庫の増築が追いつかず、保存スペースの問題は切実な様子であった。訪問時には後背部に書庫を増築中であり、側面部に日本企業が出資した「日本図書館」が2年後の完成予定で建設中であった。サッチャー政権時代の文教予算の削減は、ケンブリッジ大学のような大規模大学にはすぐには影響が出なかったものの、今頃になって響いてきたようで、予算は厳しく、資料費が伸びないとのことであった。

ケンブリッジ大学図書館のWWWホームページは、<http://www.cam.ac.uk/Libraries/>である。

ケンブリッジ大学図書館日本語資料担当の小山騰氏に、図書館内を案内してもらい説明を受けた。以下に、見学順に内容を記す。

1) 組織について

中央図書館の職員は200人少したが、大学職員の等級でいえば、大学卒MA扱いの Officer が44人位である。(オックスフォードとケンブリッジではBAを獲って3年経つと、5ポンドでMAの資格が取得できたそうで、小山氏もその方法でMAになったとのこと。)

分館として、Medical Library、Law Library、Scientific Periodical Libraryの3館があり、この他に、大学関係の図書館は100館もある。大学内で図書館は学部の一つとして扱われているようだ。

ケンブリッジ大学図書館の貸出対象図書は、蔵書数とほぼ同じ600万冊で、その中開架図書は200万冊。オックスフォード大学ボードリアン図書館は蔵書数は同程度だが、職員数は約500人。ケンブリッジでは約200人なので、この職員数の差は開架式で貸出をするか、閉架式で貸出をしないかの違いから出ていると思われるとのこと。

利用者の立場から見て、利用し易さの点では断然ボードリアン図書館よりケンブリッジ大学図書館が上という評判である。ボードリアン図書館で資料請求をして書庫から手元に届くのを待っている間(平均2時間はかかる)に、ケンブリッジへ来て、ケンブリッジ大学図書館で開架図書を使って調べてからオックスフォードに帰った方が早い、という笑い話があるほどだそうだ。

2) 貸出カウンターと開架資料

ケンブリッジ大学図書館は研究図書館 (Research Library) なので、原則的に研究が必要な人のみ利用可能であり、学生は4年次からしか利用できない。

所蔵資料は一点一冊が原則である。

書架に配架するに当たっては、まず背の高さで分けてからデューイ十進分類法に従って分類している。請求記号の体系は次のとおり。製本雑誌 (Periodicals) にはPの記号を頭に付与して、図書と混配する。登録番号と請求記号は同じ。

例) 5 8 2 . 1 4 ← 修正したデューイ十進分類
 c ← 大きさ(背の高さ)
 9 5 ← 受入年度
 2 2 ← 受入順追い込み番号

図書を開架から閉架に移す際は、代本版を入れている。大型本や貴重書、小さくてポケットに入るような本を閉架扱いとし、大きさと追い込み番号でタワーに収納する。開架分は全て製本しなくてはならないが、製本作業の優先度は下。貸出時の傷みを防ぐために製本をしている。ソフトカバーは製本してからのみ貸出可能となる。

3) カタログルーム

1977年までの資料は、ファイル式冊子体目録 (Guard-book Catalogue) による。カタログルームに入って左右の側面書架に、その冊子体目録がぎっしり並んでいる。ポードリアン図書館でも見せてもらった、紙片を張り付けるスクラップブックのようなもの。著者名順。受入年ではなく、出版年が1977年までの資料をこの目録に入れていたので、出版年が古い図書の場合、つい最近まで紙片を貼る作業をしていたらしい。

1978年以降に出版された図書は、オンライン目録でデータベース化してある。目録の機械化は、オックスフォード大学より10年早く、かつ、自前での開発であった。Eric Ceadel 館長時代(ケンブリッジ大学初の日本学者)であったため、中国語・日本語・韓国/朝鮮語のCJK問題にも始めから取り組んでいたが、館長が1979年に亡くなり、中心メンバーの Alan Turner 氏(米国人で Dublin Trinity College の電算化をした人)が本国のRLINプロジェクトへ去ってしまい、その後ケンブリッジ図書館の機械化は停滞してしまう。現在ではオックスフォードに比べて、10年は遅れているのではないかという話であった。Fortranの汎用機によるシステムだそうだ。

部屋の真ん中に、机にディスプレイを埋め込んで、キーボードのみ手前に出してある特製台に収まったOPAC端末が数台あった。立ったまま使える高さで、椅子はなかった。プリンターも見なかったような気がする。OPACは館内専用端末以外にtelnetでの利用も可能。学内各図書館の方針により、書誌情報には精粗があるらしい。

端末の手前には、図書館利用案内である Reader's Guide が番号順にたくさん並べた。新学期開始時期だったため、最新のものがちょうど出揃ったところであった。

4) 学術的重要度の低い資料の目録

カタログルームを出た左側の通路に置いてあった。カード目録 Supplementary Catalogue of Secondary Material, 1906-1977 は、手書き分、タイプ分、BIカードの混配。それ以前の冊子体目録 Sheaf Catalogue, 1800-1905 は、20cm×8cm位の英国特有の冊子体カタログである。かつては納本分については研究にとっての資料の学術上の重要度で区別していたため、メインカタログの他に、このような目録が存在した。現在のコンピュータによる目録では区別がなくなっている。

5) Reading Room

広い閲覧室で、参考図書室となっている。閲覧室中央にあるレファレンス・カウンターでは担当者1名のみで、簡単な所在調査程度の対応をしているとのこと。アメリカと違って英国には「レファレンス」の概念が無いようで、いわゆる Subject Librarian はいない。その代わり小山氏のような Language Librarian が存在するが、その人数は10人以下である。

6) West Room

Reading Room の奥に位置し、2階に仕切ってあった。製本前の新着雑誌を配架してある。

7) IT Resources Corner

IT = Information Technology。10台程度のパソコンが置いてある小部屋で、館内にはいくつかこういったコーナーがあり、CDサーバの検索などができるようになっている。プリンターは無く、FDへのダウンロードを認めている。

8) Anderson Room

音楽資料、楽譜などの閲覧室。Bible Society もここに入っている。現在、この部屋の後方に「日本館」を建築中であった。

9) Manuscripts Reading Room

全時代の写本・文書を扱う。その中では博士論文がかなりの数を占める。中世写本、ケンブリッジ大学縁のニュートンやダーウィンの直筆原稿などもある。東洋関係では Jardine Matheson の文書が量として最大。大学関係史料 (University Archives) もここに納められている。

10) 書庫

West Book Stack は 1960年代に増築されたもの。現在さらに増築中であるが、その予算は「公営宝くじ (National Lottery)」の援助資金次第とのこと。

建物に囲まれた両中庭の一階部分も、中庭を潰して書庫にしてあった。収蔵スペースの問題は切実である。

11) North Front (4階)

図書が文字通り溢れていた。書架に並びきれない図書は、"-- On Table" の表示をして窓際の閲覧机の上に別置してある。(その本の上にデスク・スタンドが載せてあるのを目撃した。) このような状態のため、図書館としては、北正面 (North Front) から早く日本関係などの東洋部門が引っ越すのを待っているようだ。

12) Tea Room

個人的に、特筆すべきは図書館内にある Tea Room だと思う。市の中心部から離れているため、食事やお茶を館内でとれるようにしてある。カフェテリア方式で、自動販売機もおいてあり、ちょっと休憩するにはもってこいの場所となっていた。食べ物の種類も豊富で、お茶時にはおいしいケーキもたくさんあって感激した。

2. 2. 西洋古刊本について

2. 2. 1. 整理

1) 担当

西洋古刊本の整理は、Special Collections Division の Rare Books Department が担当。担当部門の責任者で、副館長 (Deputy Librarian) でもある Dr. D. J. Hall に案内と説明を受けた。

当部門のスタッフは、事務室に Officer staff が4名、閲覧室に Senior assistant 1名と Junior assistant が3名とのこと。スタッフとして要求される資格 (Qualification) は、特に定めてあるわけではないが、図書館での稀覯本取扱の経験は必要である。

2) 受入

受入の大部分が一点ずつの購入である。古刊本を収集していた教授の遺文庫やケンブリッジに関係のあるコレクションをまとめて購入する場合もある。一点ずつの購入時の選書は、大量に送られてくる古書店等のカタログでおこなっている。

購入した現物が到着した後に、その保存方法を検討し、傷みが無く良い状態であればそのまま書架に並べておくが、傷んでいるものは受入後に保存箱に入れている。特別製のフェーズボックスや、市販の非酸性紙の箱や封筒を使用している。また、事務室内には長年の利用により損傷を受け、修補が必要となった本が並べてある棚もあった。

3) 目録

昨年までは Guard-book catalogue ("large green books") で目録を編纂していた。昨年からはコンピューターでのオンライン目録を開始。RLINのメンバーであるのでデータをダウンロードすることはあるが、その該当データ数は少ない。

普通は主に1850年以前の印刷本を目録対象として扱う。稀に特殊なコレクションの場合は、それ以降の出版物も扱っている。

目録規則は「英米目録規則 第2版」(AACR2)に拠る。米国議会図書館の "Descriptive cataloging of rare books. 2nd ed." と "The UK MARC Manual" を併用。件名標目表は「米国議会図書館件名標目表」(LCSH)を使用している。

現代の出版物とは違い、古刊本の目録はより詳細に記述する。標目は著者と件名。製本状態の注記なども行う。

4) 分類

開架式の現代ものとは違い、主題分類はしていない。昨年からの方法は次のとおり、印刷年代と現物の大きさ(背の高さ)で分けている。① date (printed period): 15世紀は5000番台～、16世紀は6000～、17世紀は7000～、18世紀は8000～、② size: a、b、c、d、eと大→小へ区分。ただし、特殊なコレクションなどは別の分類をしている。

5) 遡及入力

遡及入力は特別のセクションで行っており、現代のものと古刊本の両方とも対象としている。冊子体目録を元に入力をしている。主にRLINからダウンロードをするが、検索してヒットデータが無い場合は冊子体目録の内容をそのまま入力している。データは一旦、仮目録(Interim Catalogue)に登録され、件名標目等の追加、訂正を行って一定の基準を満たしてから、基本目録(Main Catalogue)に収録される。入力時に古刊本に関しての問題が発生すれば、当部門で相談を受けている。大学から3年間程度の予算が付いてはいるが、多分全てを遡及入力し終わるには長い年月がかかるであろう、という話であった。

6) 稀観本閲覧室 (Rarebooks Reading Room)

古刊本に関する参考図書が閲覧室の書架に集めてある。折り畳み式の書見台があり、利用者には書見台の利用を勧めているとのこと。筆記具は鉛筆のみ使用が認められている。

7) 書庫 (2階)

24時間連続の空調コントロールがなされていて、大変良い環境状態が保持してあった。因みに、閲覧室と事務室には空調は無いとのこと。本は特別扱いである。

所蔵する図書には普通は大学図書館名の入った蔵書スタンプのみ押印するが、特別な場合には寄贈者名入りの蔵書票(Book Plates)を貼付しているようで、ジョー

ジ1世のコレクションに貼ってある美しい蔵書票を見せてくれた。また、修補部門で再製本された資料の例を、貴重書庫の書架から取り出して説明してくれた。

2. 2. 2. 保存

1) 概要

資料の内容の保存については、大変貴重な本のマイクロフィルム化を行ってきたし、図書の形式での印刷体も出している。また、ケンブリッジ大学図書館でもMELTON財団プロジェクトが進行中であった。ユダヤ文書コレクションの電子化も行われているとのこと。

資料の形態の保存については、基本的に修復（**restoration**）はしないで、原型をとどめるべきとの考えに立っている。

2) 保存セクション

色々なプロジェクトが保存部門で取り組まれているという話で、資料保存を担当する **Administration and Services Division** の **Bindery and Conservation Department** の中の、**Conservation Section** を見学した。担当の女性スタッフが説明してくれた。

工房は広い作業場となっており、10名余りのスタッフが様々な作業をおこなっていた。他大学の研究者らも利用可能なように、研究用の重要な資料の保護のための色々なプロジェクトに対してHFCFから資金が提供されていて、スタッフはそれぞれのプロジェクトの資金で雇用されて、このセクションで仕事をしているとのことである。プロジェクトの期間は3年などと比較的長いので、頻りにスタッフが替わるわけではないが、恒常的なものではないようだ。

3) 工房での作業内容等

革装の刊本の布による修理（**repair**）には、薄くてとても強い布を使用していた。いろんな保護箱（**boxes**）や酸性紙の例も見た。

おもしろかったのは、洗浄（**Washing**）で、大きなステンレス製の流しのようなところに普通のお湯を溜めて、その中で一枚物の大きな図を洗浄中であった。対象の紙が傷まないように、ポリエステル製の紙を下敷きにして補強していた。

Exhibition Cradles という展示用プラスチック製の台を作製していた。来年フィッツウィリアム博物館で開かれる展覧会のために、展示資料一点毎に合わせた大きさで一つずつ手作りしていた。

パピルスの **Capsulation** では、ガラス板にアラビア語の書いてあるパピルスの断片をサンドイッチし、隙間を作るために細いスポンジを周辺に巡らしてあった。この仕事を担当していた女性は、京都で一年間研修してきたとのこと、修補材料に和紙が使用してあった。

マニスクリプトのクリーニングを、消しゴムと刷毛を使用して行っていた。根気のいる時間のかかる仕事という話だった。

ラミネート加工のための超音波溶接機（**HDS Keeper Capsulate**）で、一枚物のトリミングを実際にデモしてくれた。

この他に、大きな保護箱の作成や、ヘブライ語資料の修補などもこの工房で行われていた。

2. 3. 東洋関係資料

2. 3. 1. 中国・日本・韓国／朝鮮関係資料

Oriental and Other Language Division の、日本語及び韓国／朝鮮語資料担当者である小山騰氏に説明と案内を受けた。

1) 資料収集

ケンブリッジは英国の中国学のセンターであり、中国に関する日本語のコレクションはヨーロッパを誇っている。日本語資料は第二次世界大戦後、中国研究のために必要となって収集された。

2) 目録

目録は著者名と書名がある。1993年までカードを入れていたが、現在は凍結している。書名目録の主記入は書名のローマナイズ形。漢字形の併記もある。請求記号も記入してある。著者名目録は著者名の下に著作を書き足すが、請求記号の記入はないので、書名目録をひき直す必要がある。

3) 分類

中国・日本・韓国／朝鮮語の関係資料は、言語ではなく主題で分けてある。分類はケンブリッジ大学図書館で独自に作られた分類表、"Cambridge University Library Classification System for the Far Eastern Collection." による。

分類項目例)

FA 極東全体 (in general)	←	8～9割が日本語資料
FB China (exclud. Wade Collection)		
FC China (Wade Collection)		Wade は初代教授
FD Japan		
FE Other Parts of the Far Eastern		以上、開架分
FG		以下、閉架分
FH		(同上の区分で閉架用)
FJ		
FK		

このうち、FD: Japan は日本学者の Eric Ceadel による。彼が日本文学専攻だったため、「源氏物語」のあたりは大変詳しいのに、経済関係などは簡単に済ませてあったりと、分類項目に偏向と精粗がある。非常に細かく、論理的ではなく具体的な分類となっているようだ。この「ケンブリッジ大学図書館極東コレクション分類表」を使っている図書館には、ジュネーブ大学図書館がある。ロンドン大学の SOAS は、現在では日本語で書かれた中国の資料にこの分類表を使っているらしい。

このように、日本語・中国語等の資料の分類には大きさ区分を入れずにやってきたが、新日本館に移るに当たって、所蔵スペース節約のためにサイズを分けて配架するよう圧力がかかっている。新館では、今の分類を残さざるを得ないが、一方では書架の問題上、サイズ方式を導入せざるを得ず、現在検討中とのこと。

4) 英国内日本語図書総合目録プロジェクト関係

この英国 CAT プロジェクトは、元々小山氏が学情センターの猪瀬センター長に話を持ちかけたところ、当時の東芝の社長が猪瀬氏の教え子だったため、東芝の協力を得ることができ、一大学図書館では話をまとめるににくいので、英国図書館の研究開発部（前部長の Mr. Brian Perry）に表に立ってもらい、プロジェクトがスタート

したそうだ。現在は研究開発部の縮小に伴い、英国図書館が手を引いた形になっているとのこと。

英国では、H E F C E (= Higher Education Founding Council for England) が大学にお金を出すところで、レポートに基づき予算を付けている。大学図書館関係のレポートは過去に2回出ており、1960年代と最近1990年代のレポートがある。1990年代のレポートには、英国内日本語総合目録のローマ字と漢字をオンラインで処理するという話が出ていた。

ケンブリッジでは当初国立国会図書館のJ-BISCで日本語目録の入力を始めたが、データのタイムラグと援助の問題から、途中でNACISISへ切り替え、IBM5550シリーズで始めたそうだ。プロジェクトの初期に、ケンブリッジ大学図書館、ロンドン大学SOAS、英国図書館はNACISIS-CATへ自動登録(Automatic Registration)で入力した。

現在、日本の学術情報センターとの接続には、インターネット経由とBLとの専用回線があり、ケンブリッジ大学図書館ではDOS/Vの、NACPC-CATを使用している。

3ヶ月に一度学情センターより英国内個別版CD-ROMが届き、ケンブリッジ大学図書館では、このCD-ROMをサーバに載せてサービスしている。(CD-ROM→ハードディスク→サーバ→Internet、の手順。)

5) 日本企業からの援助

既述のとおり、丸井が300万ポンド(4億円)出して、日本館(Aoi Pavillion)を建設中。三井海上火災は1億5千万円位出して、「明治期マイクロ」の全セットを寄贈したそうだ。

2. 3. 2. インド及び東南アジア諸言語資料

Oriental and Other Language Division の、インド及び東南アジア諸言語資料担当者である Mr. Craig Jamieson に説明を受けた。

1) 整理業務

Jamieson 氏のオフィスでは、氏ともう1人中央アジアと中近東資料の担当者が、製本と支払い手続き以外、受入から利用者サービスまでの全ての業務を行っている。

書店のカatalogや米国議会図書館のリストなどに目を通して選書し、購入手続きをとる。本が届いたら、RLINやOCLCといった書誌ユーティリティのデータベースを検索し、目録データを作成する。目録はAACR2に拠り、LC方式のローマナイズ形で作成し、基本目録DBに入れている。諸言語の原綴形はない。オックスフォードでは中国語などが別になっているようだが、ここケンブリッジでは翻字して基本目録に入れる努力をしているとのこと。件名標目はLCSHで付与している。分類はローカルシステムにより、言語別に分けている。

2) 留学生や研究者へのサービスなど

メインカウンターで図書館の使い方をまず案内するが、東洋関係の主題についての質問であれば、東洋部門へ転送されてくる。ここでは、西洋の図書館の利用方法に慣れていない利用者に対しては、一対一で目録の使い方や本の見つけ方などを指導する。また、ケンブリッジ大学図書館が所蔵する東洋関係資料の目録が多数出版されている。

資料の電子化については、多くの文書類を電子化してCD-ROM化したり、ホームページに載せたりしているそうだ。現段階では、古い文書、特に見栄えの良い美しいものを電子化している。電子化対象の資料はここで選択し、実際の電子化作

業は別のセクションで行っている。

資料保存のためにはマイクロフィルム化をしており、19世紀の東洋諸言語資料の一部は、MELLONプロジェクトでマイクロ化されている。

3) その他

職員のサバティカルは認められているのかどうか尋ねたところ、非公式には獲っている人がいるが、いくつかのハードルを超えなければならないとのこと。また、期間中無給となるので本当の意味でのサバティカルとは言えないが、大学側としては給与を節約できるので、申し出には賛成するだろうという話であった。

新図書館建設についてのアドバイスとして、建築家が新しい図書館を使うことになる人々と話し合うことが一番大切だろうと言われた。ある特定の部屋やシステムを使うことになる人たちと、沢山打ち合わせをすべきであるし、デザインを担当する人たちと緊密な連絡をとり、現在どういう状況で働いているかを、デザイン担当者が良く見ることが必要である。難しいこととは思いますが、色んな人の意見を聞くことには価値があると考えるところ。

4) インド諸言語資料遡及入力プロジェクト

冊子体目録からの遡及入力大プロジェクトと並行して、インド諸言語の遡及入力プロジェクトも同時進行中であつた。廊下の書架の間に扉を付けてある狭い一画で、インド系の女性スタッフが1人で端末の前に座って作業をおこなっており、そこで簡単に説明をしてもらった。

1977年以前の出版物を収録している冊子体目録から、全てのインドと南アジア関係の図書のスリップのコピーを取り、それを入力対象としてある。その中には、1行で済ましてある簡略な目録から、最近の詳細な目録まで混じっていて、内容的には精粗のバラツキがある。

まず、RLINを検索し、ヒットデータがあれば必要な修正をしてダウンロードする。冊子体目録のローマナイズの方式が、時代によって異なるのが問題であるため、一旦LC形式に翻字し直して検索している。RLINに無かった資料は、現物を持ってきて目録をとっている。また、何か疑問点があれば、現物に当たって確認をしているが、ほとんど開架資料なので探すのは簡単だそう。なお、問題のあるものはとばしておいて後から調べる方針を採って、時間を無駄にしないようにしているとのこと。

ダウンロードしたデータは翌日にならないとftpされないため、すぐに修正することができないが、他にまだまだ沢山ダウンロードすべきデータがあるので、別に不便ではないらしい。

3. 英国図書館 (The British Library)

3. 1. 図書館概要

1753年の法令によって誕生した大英博物館図書館が、その後1973年の英国図書館法のもとで、大英博物館の図書館部門と関連のいくつかの組織をまとめて設立されたのが、現在の英国図書館である。ここは英国内で最も広範囲な法定納本図書館である。蔵書数は刊本だけで1300万冊余り。巨大な組織で建物も何カ所にも分散しているが、今回訪問したのは、ロンドンの大英博物館の建物の大部分を占め、有名な円形大閲覧室を持つ「大英図書館」である。この伝統ある図書館も、1、2年中にはセント・パンクラスの新図書館へ移転することになっており、資料の移動が既に始まっていた。

英国図書館のWWWホームページは、<http://www.bl.ac.uk> である。

英国図書館では、西洋古典籍にポイントを絞って見学をしてきた。

3. 2. マニュスクリプト

Department of Manuscripts の Curator である Ms. Patricia Basing に説明と案内を受けた。

1) 目録

事務室でマニュスクリプト目録作成の実際について、実例を元に説明を受けた。

16世紀の Robert Beal (エリザベス一世の大顧問) が集めた約200種類の文書の中から、ピールを外交官としてエリザベス一世がスコットランドのメアリー一世のもとに遣わした時の指令文書を例にとり、記述部分とインデックスをどう作るかを見せてくれた。目録には文書のタイトルの他、女王の署名、大臣の署名、公文書館にも別のコピーありの記述があった。

印刷体出版目録の "The British Library Catalogue of Additions to the Manuscripts." のための目録は、印刷にもって行くところまでここで準備をしているようだ。

文書目録処理は機械化されていた。文書用の特別のシステムで、1989年頃から、ニュージーランド人が作った現在のシステムを使っている。このシステムにより、記述部分とインデックス部分をリンクさせている。BL独自の著者名典拠ファイルを持ち、件名や出所(以前の所有者)なども入力。カタログ番号をキーにデータを呼び出し、画面上で校正が可能である。

17世紀の終わり頃の William Blaythwayt (ウィリアム三世の下での戦争大臣) の文書の例も見た。分類中は一時的にフォルダーに入れ、個人の単位、文書の種類(例えば手紙)、日付順でまず並べるとのこと。

2) 書庫&書架

Post Binding と呼ばれるファイルで文書が整理してあった。ねじで止めてあるため、中身の順序を入れ替えるのが容易である。アイルランドの一族であるエグモント家の文書が並んでいる所を見た。

書庫は2、3カ所のみ空調があり、それも常に快調というわけではないようだ。大英図書館設立当初からのファウンデーション・コレクションのような、重要度が高いものが最も環境の良い場所に収納されている。

展示ホール上の回廊の壁際の書架はガラス扉付きで、ここに並べてある製本済みの文書資料は、外気との接触から保護されている。展示ホールは博物館の管理している場所なので、空気の状態が良くなく、新館に移れば環境が改善されると期待されていた。文書の書架上の配列はコレクション別、番号順。製本の大きさ、棚の高さにより多少順序が乱れることもある。

3) 閲覧室 (Manuscript Students' Room)

マニユスクリプト専用の閲覧室。未製本の箱入りの文書も閲覧対象となっていた。7、8月は閲覧者が特に多く、席が全部埋まるようだ。

3. 3. インキュナブラ

Incunabula material 担当の、Mr. Martin Davies に説明と案内を受けた。

1) King's Library

19世紀のジョージ三世が収集した大コレクションを、ジョージ四世が寄贈したもので、18世紀以前の資料であり、インキュナブラ1000点ほどが含まれる。Diamond Sutra、Gutenberg、Caxton、Aldus など代表的な印刷物の展示がしてある。

印刷された図書の最も良いコレクションである Grenville Collection も、ここに置いてある。Gマークがついていて、大変価値の高いコレクション。これにもインキュナブラが800点余り含まれている。

古い建物なので一つの場所から別の場所に行くのに、大体5通りくらいの道順があるという話。見学時には、ぐるぐると狭い階段を登ったり、廊下、作業所をいくつも通り抜けたりした。扉も多く、鍵がたくさん必要である。

2) Arch Room

King's Library と Grenville Collection 以外のインキュナブラは、ここに所蔵してある。現代の出版物の目録作業も、この部屋で行われていた。

高さ3m余りの書架にぎっしりインキュナブラが並べてあった。分類記号のICが大型、IDが中型、IEが小型。印刷国別、都市別に分類。中型のドイツのものは別室に配架してある。

イタリア部門の書架から、ちょうど見学日(1996年10月16日)の五百年前、1496年10月16日にヴェネチアで印刷された、蔵書中唯一の図書を出して見せてくれた。どうしてそのことが解ったか、後で種明かしがあった。

パリでヴェラムに印刷された本の扉図には、シクストス四世にこの図書を献上する作者フィチェトス(Fischer)の絵があった。後世に、ローマ法王アレクサンドル六世のために赤のサテンで製本されたもの。この本は、なぜかヴァチカン図書館から英国図書館に移ってきたが、一方、ヴァチカン図書館には英国のウィリアム四世に献上された、この本の同じコピーがあるということ。いろんな歴史をもっている本であった。

歴史的な製本のコレクションもあり、40から50点のインキュナブラが含まれている。

3) 事務室での目録作業

有名なインキュナブラ印刷体目録である、"Catalogue of books printed in the XVth century now in the British Museum." (London, 1963-1985) (BMC) の13巻となるヘブライ語の目録を、アムステルダムから来ているオフエンベルグ博士が、この事務室で作成作業中だった。BMCの11巻となる英語のインキュナブラ編もここで作成中とのこと。BMCは1~10巻、12巻が既刊である。

"Incunabula(-ble) Short Title Catalogue (database), produced by the British Library." (ISTC) は、1980年から構築が始められたインキュナブラの世界総合目録データベースで、現在約28,000件のレコードが登録されている。このISTCを使って、500年前に出版された図書を、出版日付「1496年10月16」で検索し

て見せてくれた。4点ヒット。その中の一点が英国図書館に所蔵されており、先程 Arch Room で手にとった本はこうして見つけれられたわけである。ISTCではインキュナブラの世界中の所在状況が把握可能となっている。日本でのインキュナブラ全国所在調査は、早稲田大学図書館の雪嶋宏一氏によって行われ、このISTCを使って目録の編纂がなされた。(参照:『本邦所在インキュナブラ目録』雪嶋宏一編 東京、雄松堂出版、1995年)

世界最初の活版印刷本といわれる「グーテンベルグ聖書 (Gutenberg Bible)」の King's Copy を間近に見ることができた。最初のページは42行で、手彩色である。ジョージ三世の蔵書であったため King's Copy と呼ばれている。英国図書館には、もう一点 Grenville Collection の中に、ヴェラムに印刷されたグーテンベルグ聖書がある。

開発中のISTCのCD-ROM版のデモも見せてもらった。この "The Illustrated ISTC on CD-ROM" には画像データも収録されている。本来はカラーの画像になるべきだが、白黒が多いとのこと。まだ実験段階であったが、1996年12月までには市場にでる予定。画像をより鮮明にすべく努力中で、最終的にはインキュナブラ28,000種類全ての画像を入力する予定である。この画像データの写真を撮るために、「グーテンベルグ聖書」が King's Library の展示ギャラリーから事務室に持ってきてあった。

4) 円形大閲覧室

回廊より円形大閲覧室を見た。見学時は比較的静かであったが、夏の間は満席でもっと騒がしいそうだ。この「楽園 (paradise)」から引っ越さなければならないのは残念だとのこと。あと一年以内にはセント・パンクラスの新館に移転する予定で、既に本の移動が始まっていた。1997年11月には新聞閲覧室が開室予定であり、非常に大きいため1年かけて引っ越すという話。

回廊の本棚に見えたところが実は扉になっており、そこから廊下へ出た。

3. 4. 英国古刊本の受入業務

English Antiquarian Section で、Mr. Mervyn Jannetta から説明を受けた。

ここでは、英国で印刷された古い図書の受入を担当している。書店からのカタログ、オークション・カタログ、取引書店からのリストなど、毎日郵送されてくるこれらに目を通して購入したいものをチェックし、準備段階として、自館のカタログを調査している。話だけ聞くと簡単に思えるかもしれないが、非常に複雑な仕事であるとのこと。なぜなら、既に豊かなコレクションを英国図書館は所蔵しているからである。おもしろそうな図書を注文してみて、実際に現物が手元に届いてから、もう一度詳しく調べ直している。この時点で本の状態の評価も行い、なにか欠陥のある図書は購入しない方針をとっている。ただ、挿し絵入りの図書は、もとの挿し絵の数が特定できないので、欠陥があるかどうかの判断が難しいとのこと。

購入作業を助けるための参考図書類が事務室内に置いてある。A. W. Pollard and G. R. Redgrave (comp.), "A Short Title Catalogue of Books printed in England, Scotland, & Ireland and of English books printed abroad 1475-1640." (London, 1920) (STC) の欄外に購入記録が記入してあった。目録前でも記録がとれるように、受入段階では小さなカードを手書きで作成している。

ケニオン郷の蔵書であった英国16世紀の宗教関係の図書など、いくつか受入中の古書を見せて頂く。ケニオン郷の本は何千ポンドもした大変高価なものだそうだ。

3. 5. 利用者サービス

閲覧室や書庫を見学しながら、Mr. John Goldfinch より説明と案内を受けた。
(見学中、しょっちゅう階段の上り下りがあるので、この仕事をするには健康で体が丈夫でないと勤まらないという話を聞いた。)

1) North Library

貴重書(初期刊本、高価な書物、稀観書など)の閲覧室。8~10席の机が10台ほど。一般図書に比べて、貸出時に貸出記録を詳しくとり、貸出時・返却時の一冊一冊の現物チェックを厳しく行っている。マニスクリプト閲覧室と同様に、ここでも鉛筆のみ使用を認める。利用者の閲覧時の図書の取り扱いも、注意して見ている。

英国図書館の蔵書は、全て利用者に見てもらおうことが伝統となっているが、ただし、ごく僅かだが非常に壊れやすくなっている本があり、これはマイクロ形式で見てもらおうようにしている。ところが、現物を見る必要があるという利用者がいれば、例えばオリジナルの本の紙の質を調査していたり、製本の研究をしている人の場合は、オリジナルも実際に使うことを許可している。というわけで、非常にオープンな形でやっているとのこと。

この閲覧室でコンピュータの使用が許可されている机は限られているが、コンピュータを使いたい学生が増えてきているので、そのことが問題となっている。1930年代の電気配線のままの古い部屋であり、1998年には閉室となることが決まっているため、新たに配線工事をやり直すことはしたくない。その結果、10席程のコンピュータが使用可能な机は、いつも非常に混んでいる。

専門の職員(curator)が閲覧室に居て、質問をいつでも受け付ける体制は比較的新しく始めたサービスである。5~10年前に比べて古い資料を利用したいという利用者が増えている。よって、セント・パンクラスの新館では、貴重書閲覧室はもっと広いものとなることになっている。最近図書の一部分を切り取るという盗難事件があったため、監視用のカメラを設置した。以前より注意深くなる必要がでてきたということ。大型図書を使うための書見台がカウンターの前にあり、壊れやすい図書なども、職員の目が届きやすいこの場所で利用してもらうようにしてある。

ここの他に、楽譜、地図、政府刊行物には個別の閲覧室がある。

2) North Library 書庫

"Mikey Mouse Annual"なるミッキーマウスの絵が表紙に付いた本が書架に置いてあった。他の図書館とは違い、こういう本も永久に保存して利用に供するのが英国図書館の国立図書館たる特徴であるとのこと。

蔵書の中では、19世紀に外国から購入した本が特に豊かで、コレクションの強みとなっているようだ。

マイクロフィッシュも利用の管理上ここにある。

3) Central Sorting Area

書庫から降りてきた本、外部の倉庫からの本をまずここに集め、どの閲覧室へ持っていくかをここで仕分けている。閲覧室から返ってきた本を再びここで仕分けし、正しい場所へ戻す。倉庫はロンドンに2カ所、イングランド北部のヨークシャーに1カ所ある。この建物内では書庫が19カ所に分散しているようだ。

4) 大閲覧室

利用者がカウンターへ閲覧したい資料の申し込みをし、その資料請求票を職員がそれぞれの場所へエアシューターで送る(以前見た国立国会図書館でも同様の円筒形のものを使っていた)。緑色の大きな冊子体総合目録は、全てコンピュータに

入力済みだが、印刷目録をチェックし直す作業がしばしば必要となってくる。「カタログは多すぎるといえることはない、多ければ多いほど良いのだ。」とのこと。

壁沿いの書架には参考図書が配架してある。それ以外の資料は全て請求票で申し込まないと利用できない。一部、空の書架があった。新図書館へ移動するために本を移しているためである。新館では、参考図書にはデューイの十進分類を使うことになるそうだ。これはBLにとっては非常に最近になって始めたことである。

5) 複写室

利用者が自由にコピーすることが可能。普通のコピー機の他に、本を完全に開かずにコピーできる特殊な機械や、カラーコピー機、マイクロ複写機などがあった。職員でないとコピーできない資料もあるが、職員による複写は当然料金が高くなる。

3. 6. 資料保存

Preservation Section の Mr. Edmund King から説明を受けた。

1) 概要

保存を担当する Preservation Department は、200人程のスタッフを抱える非常に大きな組織である。それらのスタッフは仕事の種類によっていくつかのグループに分かれている。例えば、マイクロフィルムの写真を撮る仕事、細かい特殊な保存・修理を専門にする仕事など。また、BL外部に仕事を送り出すこともある。紙の修復、複製本等を、民間の業者と契約して請け負わせている。

BLは莫大な資料を所蔵しており、刊本、地図、楽譜、録音物、マニュスクリプト（西洋、中東、極東）、公文書（英国第二の規模で、東インド会社に関するものは英国最大）など、資料の種類も莫大なものとなる。従って、これらの非常に異なった資料が必要とする保存の種類も様々となる。そこで、現在管理している資料のそれぞれの物質的必要性に合わせた、様々な修復（repair）のためのプログラムを作成している。この部門の年間支出は約500万ポンドである。

2) 保存箱

契約外注の保存箱作成では、各資料にぴったり合う箱を作成している。箱の材料はBLが許可したものに限り、非酸性ということが重要である。これらの保存箱は長期にわたって使用に耐えることを期待されている。本の背に当たる部分に折り目があり、手に持つとそこが開いて下に落ちるように作られているため、Drop Back Box または Drop Spine Box と呼ばれているようだ。この形であれば、本を出し入れするとき無理な力を掛けずに取り出すことができる。

BLの契約外注の仕事の特徴は、本そのものは図書館外に出さないことである。本の寸法を館内で計って、その寸法を元に業者が保存箱を館外で作成し、出来上がった箱を納品して、館内で本を箱に収めている。印刷本の保護のために、現在までに保存箱を70,000個ほど作成した。

3) 一般製本

雑誌等の一般的な一次製本も行っている。国立図書館であるため、法律関係の書類の製本は優先的にプログラムの一つとしておこなっている。

4) マイクロ化

新聞資料を対象とした、マイクロフィルム化のプログラムがある。新聞そのものを保存することは不可能であるため、一部はオリジナルのまま保存するが、それ以外はマイクロ化するのが方針となっている。ロンドン北部で保存部門の職員2

0名以上が、毎日、新聞をマイクロフィルムに収めている。

BLでは3世代のマイクロフィルムを作成している。①記録保管用（archival）ネガ、②ネガのコピー、③利用者用ポジティブ。問題は利用者がマイクロフィルムを使いたがらないことであるが、マイクロフィルム化することは大事なこと。なぜなら、紙は非常に脆いものであり、特に1850年以降の紙質が問題となっている。

5) 劣化資料対策

全世界的に問題となっている資料劣化は、BLにおいても非常に重大に捉えられている。保存部門では、長い間継続的にこの問題の解決策を検討してきた。

大量脱酸処理法は、効果的な場合もあるが、BLでは使っていない。なぜなら脱酸処理はどのようなやり方をとっても、結局紙をそれ以上丈夫にすることはないと判断しているからである。当面のところは、人手による脱酸処理方法をとっている。

必要な場合は紙自身の強化もおこなっている。これはラミネーションという方法で、シートでオリジナルの紙をサンドイッチし、熱により上下のシートの繊維がオリジナルの紙に粘着するようになっている。シートは非常に強く無色透明な一種の tissue paper である。加工後もオリジナルの文字ははっきりと読める。刊本についてはこの方法を非常に幅広く使ってきた。なぜなら、できる限り利用者に実際の本を読んで欲しいと考えているからである。この処理は可逆的であり、取り除いて元の状態に戻すことが可能である。この方法での問題は、本の厚みが増すことだそうだ。

6) 資料劣化の予防策

保存の一面として、そもそも所蔵資料が傷むことを予防する、という方法があることを忘れてはならない。BLでは気温や湿度を理想的な状態に保つこと、光度を落とすこと（特に展示部分の照度）、虫害の除去などに努めている。

保存政策の中には、万一大きな災害が起きた場合の救助計画も含まれている。救助計画は既に書面になっており、BLの建物の中とロンドン内の他の倉庫にも計画書が収納されている。

3. 7. 資料電子化

1) 電子化の当面の問題点

資料の内容の電子化については、新しい技術ということはよく理解しているが、問題点が二つある。第一は、電子化の結果が長続きしないかもしれないということ。ディスクや情報そのものには耐久性があるが、新しいハードウェアやソフトウェアにそれらを更新し、データを移行することによりかなり費用がかかる心配がある。また、電子化に関しては現在国家的・国際的な規格が無いこと。つまり、電子化した形で情報を交換することが必ずしも可能ではないということ。第二の問題は、資料の量である。現在扱っている情報の量が大変多いので、それを全て収容し、かつ利用者が検索可能な状態で収容できるかということが問題となってくる。この問題はこれから増えてくると予想されるため、BLでは新しい方法を開発しているところである。

保存に関連した電子化の問題では、非常に貴重な資料の電子化が将来行われるというはっきりとした見通しがある。例えば、BLでは "Beowulf" の写本を既に電子化している。

2) システム概要

Photographic Section (Image Digitisation Unit) に案内してもらい、電子化作業を担当しているスタッフと、King氏から説明を受けた。

ここでは、稀観書の電子化を行っている。普通のカメラの上にデジタル化用の電子器具を付け、それがコンピュータにつながっていてカメラに写る画像が画面に出てくる。画面を見ながらコンピュータで色や明暗の調整が可能。出来上がったデータはCD-ROMに移して保存する。鮮度の高い映像がでる。デジタルカメラとして市場に出ているものの中では最高級のものを使っている。ソフトウェアは、画像を捉えるためには **Photophase**、画像を調整するためには **Photoshop** を使用。二台のコンピュータが接続しており、CDライターでデータをCD-ROMへ書き出している。

撮影対象資料には継続的にライトをあてておく必要があるが、資料を傷めないように紫外線がでない低温の照明である蛍光灯を使用している。現在は聖書を電子化しており、最近購入した "Tindall Bible" を撮影中であつた。アメリカに展覧会用として貸し出す予定なのでその前に撮影しているそうだ。一枚撮影するのには4、5分かかる。CCDデバイスはデンマーク製の **DeVere480** を使用しているが、最新式は日本製だとのこと。

普通の写真と同じくらいで2、3分でプリントアウト（現像）することができる。化学薬品を使わないので環境保護には普通の現像よりも適している。

3) 電子化の将来的な問題点

CD-ROM化を考慮中であり、インターネットを使って情報発信することも可能。しかし、量の問題がある。図書館で何千枚もの画像データを作ることは可能だが、そうなるとますますコンピュータの世代間のデータ交換が難しくなる。

現在、ある程度まで図書館はテクノロジーに引っ張られている状態。計算機と同じようなもので、それができた当初は非常に高価であつたが、今では電卓は1、2ポンドで買えるわけで、このような電子化に必要な器具もそれとおなじことになり、2、3年あるいは12、13年のうちにそれほど高価ではなくなるかもしれない。もしこういった器具が非常に簡単に入手可能で安価になれば、図書館や史料館には問題が起こってくる。何を、どれくらいコピーすべきか、あるいはどの程度の情報を無料で流し、どの程度を有料とするかという問題である。

著作権の問題については、著作権のある資料は現在対象としていないようで、古い資料を電子化していた。英国の著作権法では研究目的であればいくらかでもコピーが可能ではあるが、まだ著作権のあるものをBLで電子化する予定はない。そういった資料は出版社自身が電子化するであろう。

現在BLで電子化中のデータをインターネットで日本から見ることができるようになる可能性は確かにある。ただし、インターネットにどのようなものを載せるかは、まずそれぞれの図書館で選択をする必要がある。既に「ベオウルフ写本」は、BLの情報サービスシステムである **Portico** を通じて、インターネットで見ることができるようになっている。それ以外の写本もインターネットで見ることができるようになるとすれば、多分「ベオウルフ」と同じ形となるであろう。

こういうような種類の、非常に質の高いコピーに対する需要が世界中からたくさん出てくるといことは疑いがない。図書館の立場としては、まず、画像の質をどの程度まで上げていけばよいか、そして世界的にどのくらいの質の画像を流すかを決めなければならない。図書館でどの程度のものを作るかということと、どの程度のものを外部に流すかということは必ずしも同じことではない。こういった技術のおかげで、組織に問題が出てきているが、これはその良い具体例の一つである。

このような電子化技術は非常に素晴らしいことではあるが、そのために問題が起きてきている。どの程度の仕事をするか、どのくらい急いであるか、どのくらいの質までもっていくか、といったことである。歓迎しないわけでは決してないことを強調するが、そういった実際的な問題に関する決断は、かなり時間をかけてゆっくりおこなっている。多分注意深くやった方が賢明なのではないかと思っているという話であつた。

おわりに

九州大学図書館では近年、大型コレクション等としてインキュナブラを含む西洋古刊本を受け入れてきた。これらを整理する上で必要な知識の基礎を得るために、数年前には「トマス・アキナス・コレクション」などのラテン語古刊本を材料として、法学部の西村重雄教授の指導の下に図書系職員を対象にした「ラテン語研修会」が開かれていたこともあった（参照：『図書館情報』Vol. 29, No. 3, 1993）。また、資料保存問題については、国立大学図書館協議会の全国調査の一環として、九大所蔵資料の酸性劣化調査が行われたことがある。しかし、今や情報化時代の流れの中で、現在の図書館の関心の主体は情報システムや電子図書館の方へ向いているように思える。

しかしながら、本学の新キャンパス計画専門委員会情報・図書ワーキンググループは、平成7年10月にその報告「新キャンパスにおける情報・図書施設計画」で、新図書館が持つべき機能として、電子図書館機能とならんで保存図書館機能や特殊コレクションの利用機能等をあげている。

特に、大学図書館が所蔵する学術研究資料の保存対策の重要性については、平成8年8月に国立大学図書館協議会が文部省に提出した「大学図書館機能の強化・高度化に関する要望書」の中でも述べられているとおりである。

また、平成8年7月29日付で学術審議会が提出した建議、「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」においては、資料保存対策の一つとして資料の電子化が位置づけられている。

なお、九大図書館では、平成8年度から特殊コレクションを含む九州大学の目録データベースの遡及入力について本格的な取り組みを開始し、電子図書館機能については、同6月に「電子図書館構築計画（案）」として画像データベースや全文データベースなどの具体的な計画がまとめられ、一部試行がなされているところである。

以上のことから、従来の整理・保存対策に加えて、資料の電子化等も今後検討すべき課題であることを念頭においた上で、英国の図書館を実際に訪問してそれらの方策を見学し、担当図書館員の意見を聞くことができたことは、新図書館構想の流れの中で、もう一度西洋古刊本の整理や資料保存の問題を捉え直すに当たって、大変有益なことであった。

今回の訪問で、特に印象に残った点は次のとおりである。

1) スペシャリスト体制

最も印象的だったのは、英国の図書館員がそれぞれの分野でのスペシャリストとして活躍している姿である。少なくとも我が国の国立大学図書館では、図書館員はある分野でのスペシャリスト（専門家）となる以前に、ジェネラリスト（何でも屋）として浅く広い知識を要求されているように思われる。歴史的な背景や仕事内容の違いもあるので一概には言えないであろうが、じっくり特定の分野での専門知識を蓄積する「専門職」の伝統を持ち続けている、彼の地の図書館員を羨ましいと感じたのも事実である。

特に資料保存問題に関して、図書館組織の中で保存部門が独立し、その一定の方針の下で、日本では稀少なコンサーベーター達が、工房で地味な根気のいる仕事をしている様子は、資料保存の重要性が提唱されながらもその対策が進んでいないこちら側の遅れを一層痛感させた。

西洋古刊本の整理では、図書の出版年代（1850年以前）で現代の出版物とは区別し、稀観書のための目録記述法を用いて、専門の担当者が目録データを作成し

ていた。そのデータ内容には参考となる点も多く、九大図書館でも、せめて米国議会図書館の "Descriptive cataloging of rare books, 2nd ed." (Library of Congress, 1991) ぐらいは、洋図書目録の基本マニュアルの一つに加えるべきかもしれない。

アジア系留学生・研究者の受け入れ体制と、それに関連した東洋関係資料の収集・整理・保存においても、各東洋諸言語の専門家がその担当者となっているため、一般的な図書館利用案内程度の表層的なサービスとは違った、十分なサポート体制ができているように見えた。我が国でも本格的に受け入れ体制を整えるためには、言語はもちろん、資料についての知識を図書館員自身が更に身に付けていく必要があるだろう。

2) プロジェクト体制

「公営宝くじ」や企業の援助、「図書館友の会」などからの資金獲得努力は、近年の文教費削減の影響もあるようだが、日本では見られないほど熱心に行われていた。このような資金獲得のために、様々なプロジェクトを組んで問題解決に取り組む姿勢には見習うべき点が多い。ただし、大小の色々なプロジェクトを同時進行させるためには、大局的視野に立った計画性が必要である。予算が付いてから動き出したり、一部のセクションや担当者に過重な負担がかかったりすることなく、プロジェクトのための特別なスタッフを確保した上で、継続性を持ってうまく運営されているように見受けられた。

3) 資料電子化問題

資料電子化への取り組みは当然始まっていたが、各図書館とも資料内容保存のための電子化には慎重な姿勢が伺えた。保存手段としては、過去の実績があるマイクロフィルムが断然主流であった。特に、英国図書館で聞いた電子化に関する様々な問題点は、そのまま我々の図書館にも当てはまることであり、今後検討していかなければならないことであろう。

以上、訪問の計画から実施まで、約3ヶ月という短い期間の中で試行錯誤しながらやってきたが、大変良い経験をする事ができたと思っている。

訪問先のオックスフォード大学ボードリアン図書館、ケンブリッジ大学図書館、ロンドンの英国図書館では、事前をお願いしていた訪問テーマに沿って、実際に仕事の現場を見せていただき、担当の図書館員の方達と会って直接話しを聞くことができた。今回初めて英国の地を踏んだのだが、これまで文章や写真でしか接したことのないこれらの図書館が、大変身近に感じられるようになり、まさしく「百聞は一見に如かず」を実感することとなった。

このように、私が図書館員として西洋古刊本に関わり始めて以来の夢であった「英国歴史的三大図書館」訪問が、無事スケジュールどおり実現したのも、たくさんの方達の助力のおかげである。

最後になったが、これらの方々にお礼を述べて、この報告を終えたい。

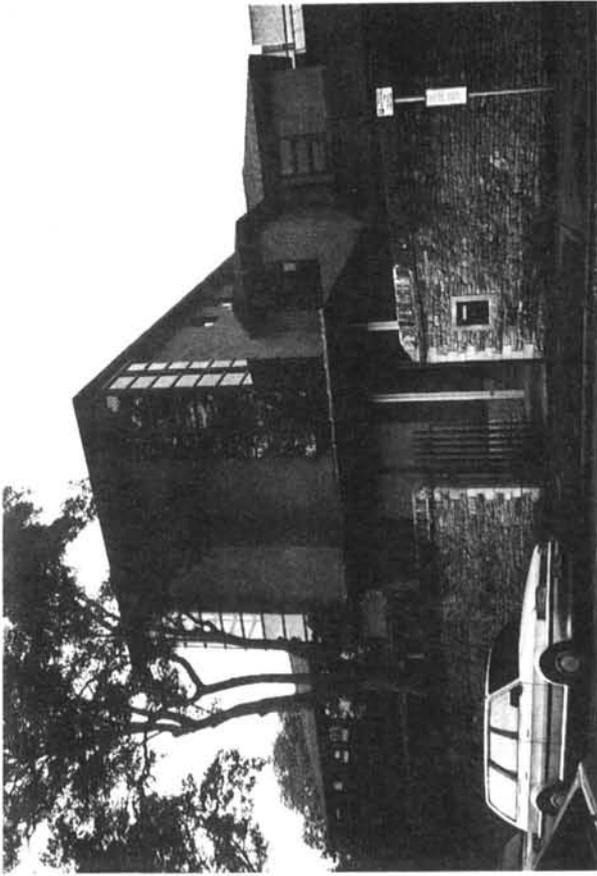
今回の出張に際し、事務局の皆様および附属図書館の皆様には、特段のご配慮をいただき、ありがとうございました。

訪問先とのスケジュール調整などでは、東京のブリティッシュ・カウンシル図書館の高木和子館長に大変お世話になりました。

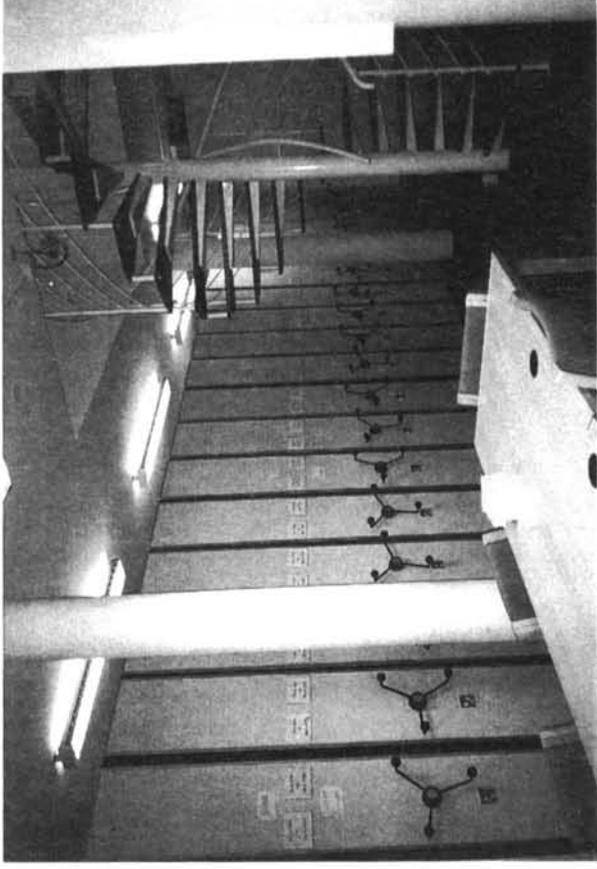
そして、私の英国出張が内定した時に、ちょうど文学部での臨時講義のため九大図書館にいらっしやっていた、図書館情報大学の松村多美子教授に感謝します。松村先生が、英国図書館の前研究開発部長 Brian Perry 氏に連絡をとって下さったことがその後のアレンジメントに生かされ、先生のご紹介のおかげでブリティッシュ

・カウンスルにお世話になることができました。

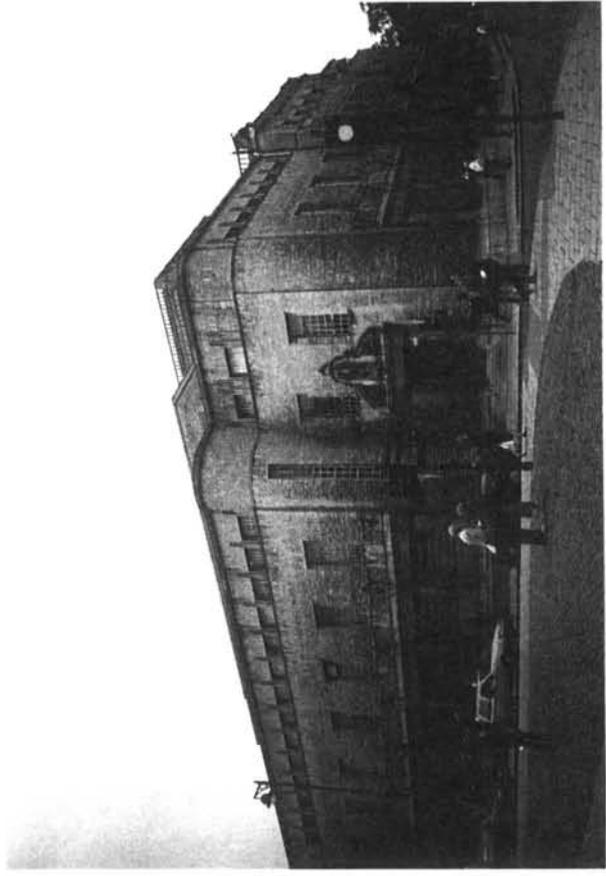
おわりに、新学期開始時期のお忙しい中、親切に対応して下さいました訪問先の図書館の皆様にお礼を申し上げます。



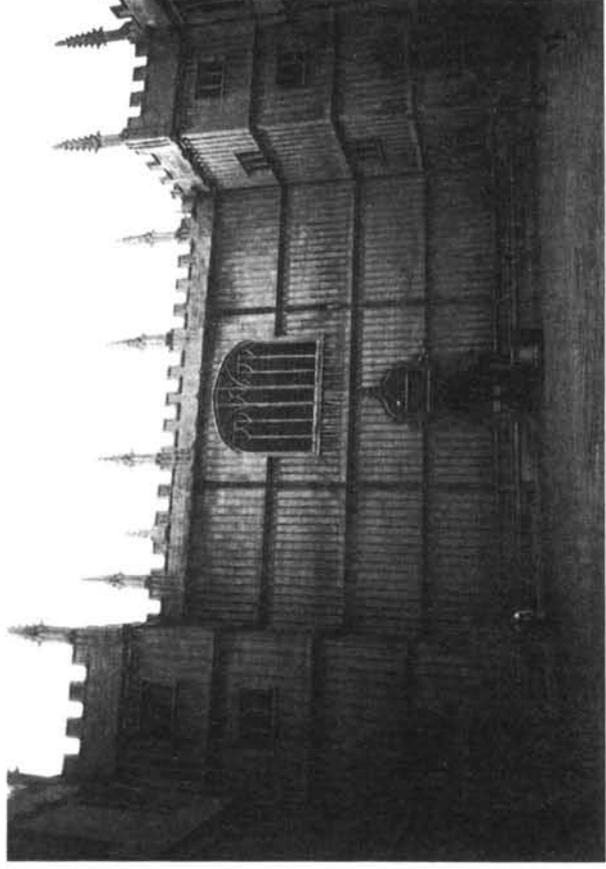
Bodleian Japanese Library



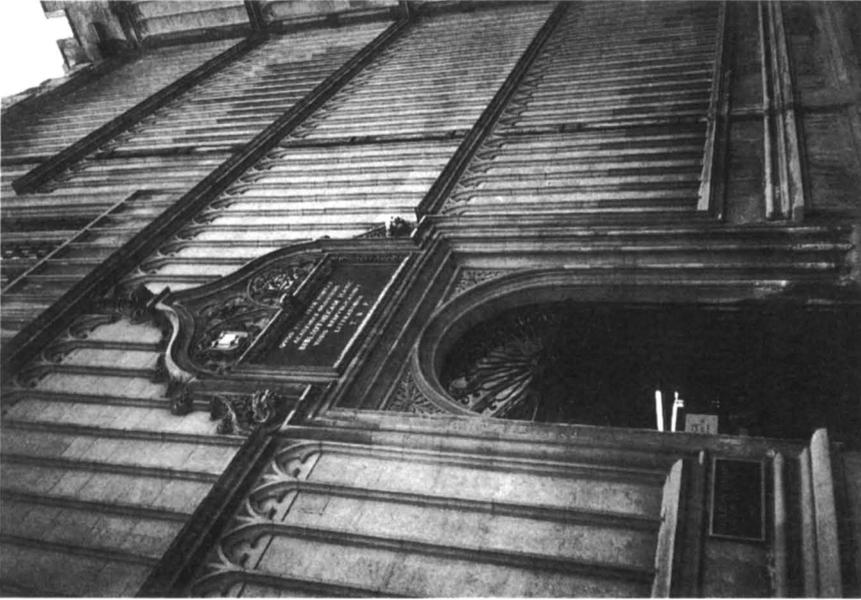
Bodleian Japanese Library 地階書庫



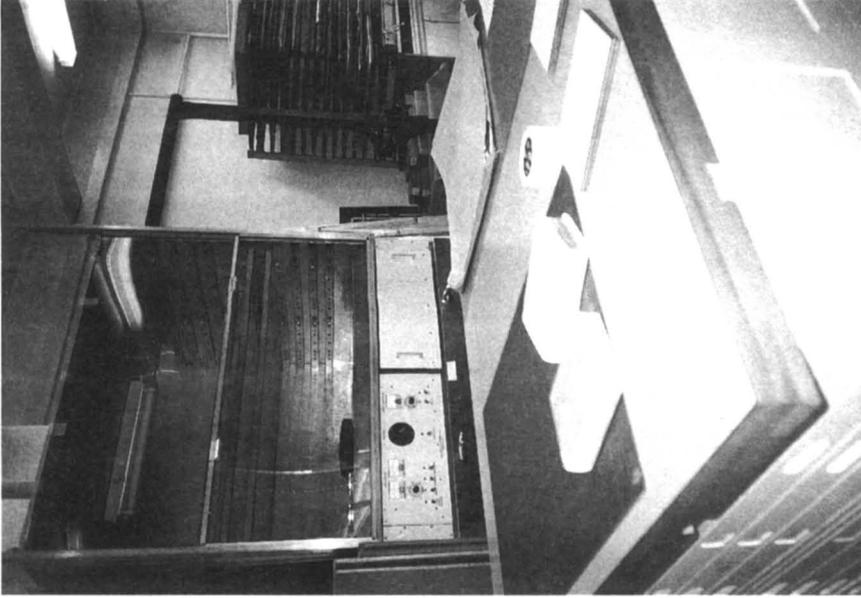
The Bodleian Library. New Library



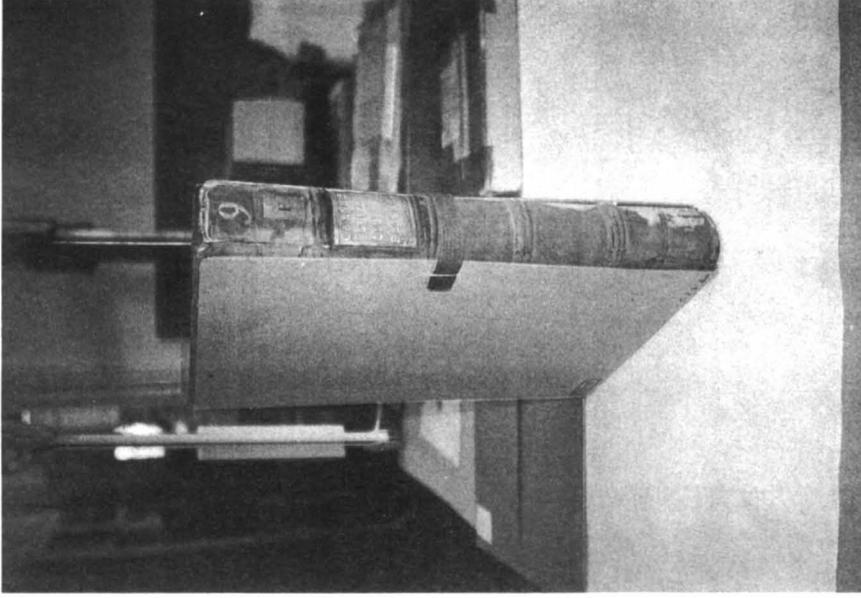
The Bodleian Library. Old Library



The Bodleian Library.
Old Library 入口



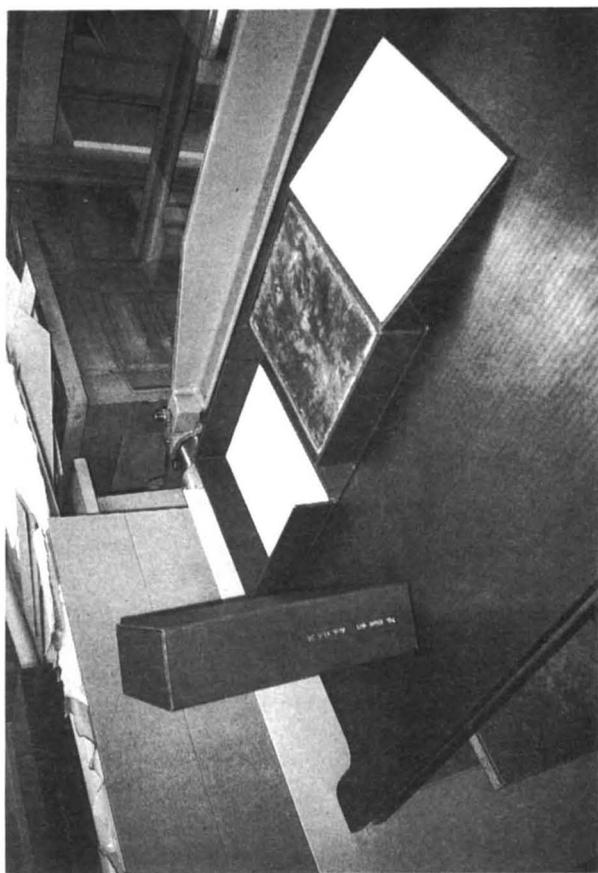
The Bodleian Library.
Conservation Bindery Room
(修補製本)



The Bodleian Library.
Conservation Bindery Room
(7* ヲカ・シユ一)



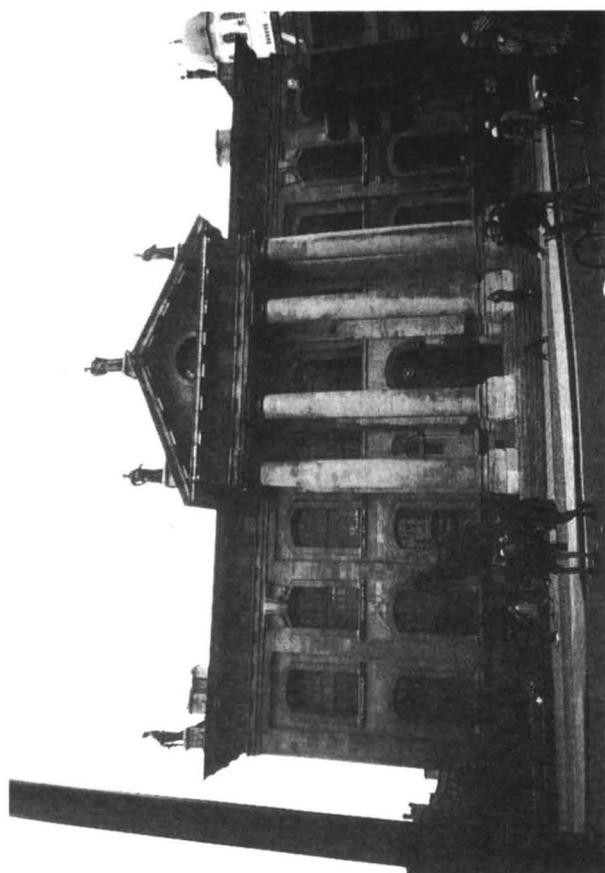
The Bodleian Library. Boxing Room (フェイスボックス)



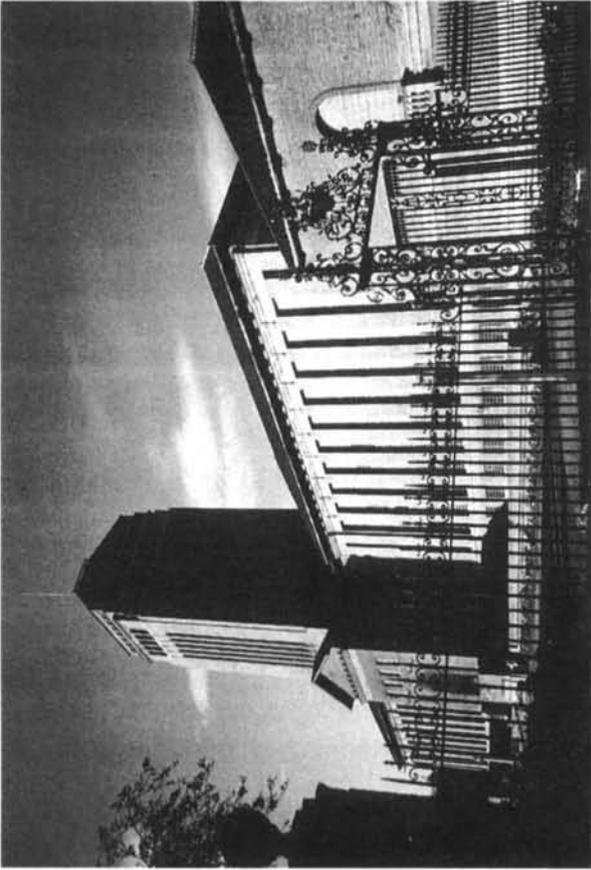
The Bodleian Library. Boxing Room (永久保存用箱)



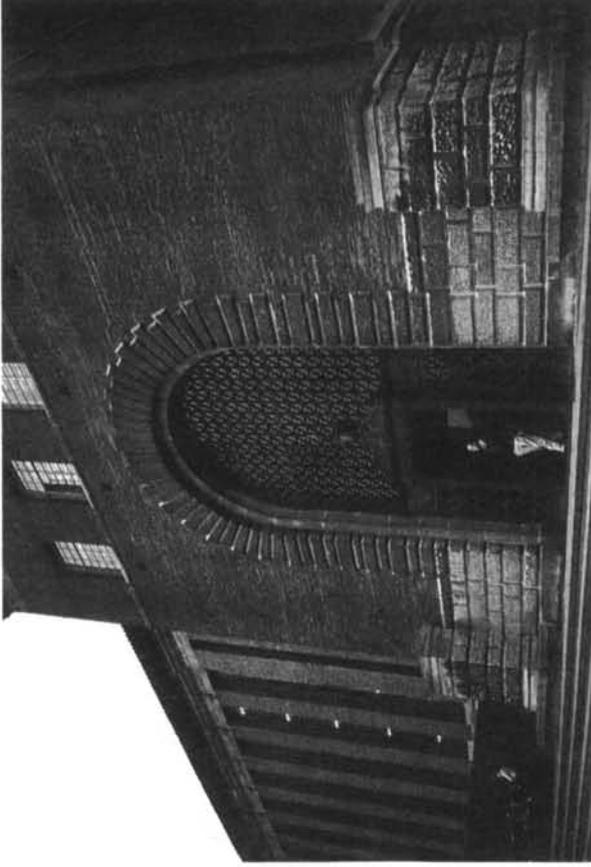
The Bodleian Library. Sheet Room (大型一枚物用保存箱)



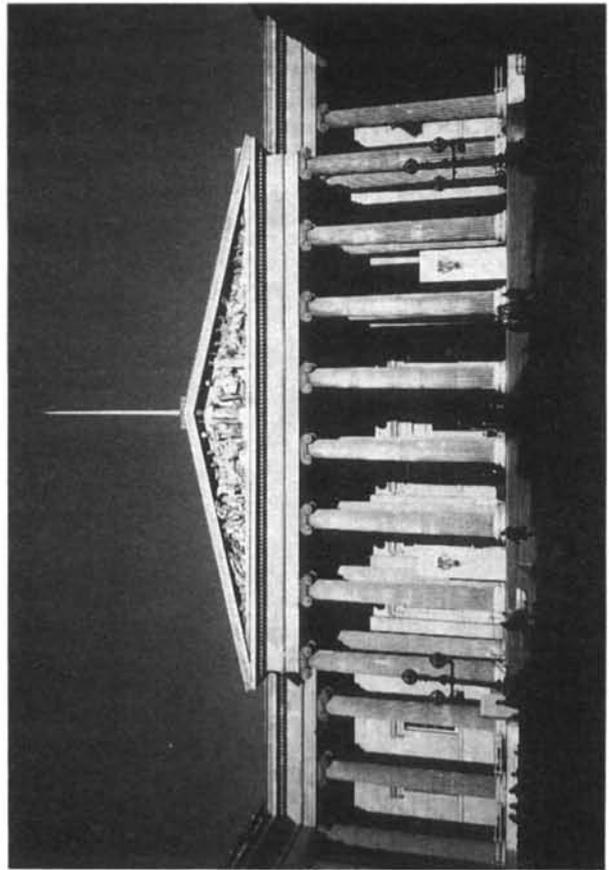
The Bodleian Library. Clarendon Building



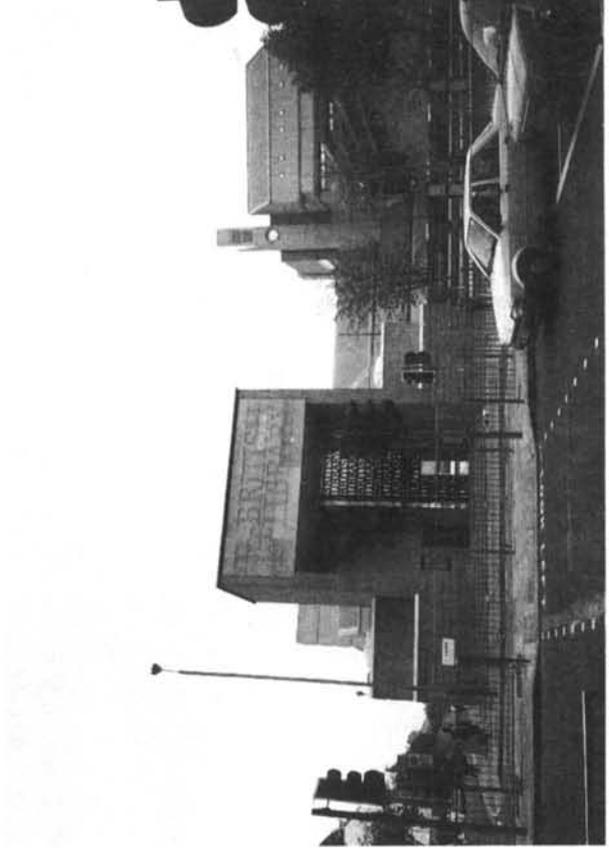
Cambridge University Library



Cambridge University Library 入口



The British Library



The "New" British Library. St. Pancras Building